毎日新聞 21.6.-7(夕刊)

見上げてごらん

永山悦子

コロナは人ごと？

世界保健機関（WHO）が、昨年12月にリリースを出した。題して「たばこをやめるべき100以上の理由」。たばこで毎年800万人以上が亡くなっている、子どもの健康を害する、費用がかかる、不妊につながる、さまざまな病気を引き起こす――など、全部で104項目も並んでいた。

ひときわ大きな文字で書かれた1番目の理由が「喫煙者は新型コロナウイルス感染症が重症化したり、死亡したりするリスクが高い」。そこに添えられた画像のキャッチコピーが強烈だ。「たばこ産業が肺を弱めているところへ、新型コロナウイルスが狙い撃ち」。コロナをめぐるWHOの対応には批判もあるが、この問題への姿勢は毅然（きぜん）としている。

喫煙者の重症化リスクが高いことは明白だからだ。変異株に感染して重症化した若い世代にも、喫煙者が目立つという。そもそも喫煙は心臓や呼吸器の病気、生活習慣病、がんの原因でもあり、これらの病気もリスクが高い。

にもかかわらず、気になるデータが発表された。国立がん研究センターがアンケート調査をしたところ、「コロナに感染すると重症化しやすい」「喫煙所は感染が拡大しやすい」「喫煙所の閉鎖に賛成」と答えた喫煙者は3～4割だった。非喫煙者の6割程度に比べ、かなり低い。「禁煙したい」と答えた喫煙者も25％にとどまる。

これだけコロナが社会問題になっているのに、このギャップは何？　たばこ政策に詳しい望月友美子・新町クリニック健診部長は「喫煙者は、たばこの害を自分のこととして認識しない傾向がある。コロナも同じ状態になっている」と話す。喫煙者にとって「コロナの重症化」は人ごと。「自分はまだ大丈夫」と思うようなのだ。

さらに今回の調査で深刻に感じたのは、在宅勤務の拡大によって、喫煙する同居人がいる非喫煙者の3分の1が「受動喫煙が増えている」と答えたことだ。

国内では受動喫煙で毎年1万5000人が亡くなる。昨年4月に公共の場を原則禁煙とする改正法が全面施行されたが、「家吸い」は法の対象になっていない。そこから逃げたり「NO」と言ったりできない人もいる。この調査結果をもとに、改めてたばこや受動喫煙の怖さを啓発すべきだ。

この記事を人ごとと思っているあなた、自分のことですよ。

（くらし医療部）